

〈特集：母子保健のこれから〉

八千代市での母子保健活動

佐藤 千枝子¹⁾, 岩永 俊博²⁾

1. はじめに

核家族化や少産少死化, 子育て親や家族観の多様化など母子保健をとりまく社会環境は変化し, また母子保健法の改正によって, 市町村での母子への対応も変化を迫られている。千葉県八千代市は, 習志野保健所管内で人口約15万人で, 新しい都心から直通的な交通機関が1996年に開通し, さらに人口増加が予想されている。年間出生数は約1,500人で, 市保健センターは健康管理課と訪問指導課とからなり, 職員は, 事務職の両課長と, 保健婦, 看護婦, 栄養士, 歯科衛生士, 理学療法士, 事務職など38人である。

八千代市では, 1992年頃から自分たちの保健活動の進め方を見直しはじめた。それにともなって, 母子保健活動についても, 何を目的としているのかを, まずスタッフ間で確認し, さらに, 母子保健推進員や施設, 保育所などとも一緒に考えるという展開を行っているので報告する。

2. 見直しまでの経過

保健センターでは機構改革が行われ, それまで一つの課で仕事をしていた保健婦が「健康管理課」と「訪問指導課」の二つの課に分けられることになった。しかも, それまでの間に職種も保健婦, 看護婦, 栄養士, 歯科衛生士と, 多職種が揃ってきていた。自分たちの保健活動をどのように進めたらいいのだろうか。このままでいいのだろうかなど, 自分たちの活動の進め方に疑問を抱きながらも, だからどうしたらいいのか, どこから手を着けていいのか悩んでいた。

さらに追いかけるように, 「保健所法が改正されるらしい, そうすると保健所がなくなるらしい, 母子保健

もすべて市でやることになるらしい」と, 慌ただしくニュースが入り, 落ち着いて仕事をすることでではなかった。

そのような時期に, いろいろな学習会に参加していた保健婦たちが出会った理論が, WHOから提示されているヘルスプロモーションの考え方であった。「健康は最高水準の生活を営むための資源であって, 健康そのものが目的ではない」「健康は保健分野の努力だけで実現できるものではない」という。そのような考え方に当てはめてみると, 自分たちがそのころ悩んでいたことの解決の糸口が見えたような気がした。

そこで保健センター内でヘルスプロモーションについて勉強を始めた。この考え方は, センターの職員にとって自分たちの活動に対する考え方を根底から引っ繰り返すほどの影響を与え, 職員は発想の転換を迫られた。今まで, 住民が病気になるようにすること, そのための早期発見, 早期治療, 生活習慣の改善などに視点をあてた活動を進めてきていた。もちろん病気になるようにということは重要なことである。しかし, 生活習慣の改善や早期発見, 早期治療のように本来手段であるべきものが目的になっていなかっただろうか。「病気になること」を目的とするよりも「健康を実現すること」を目的とすべきではないかということである。

そのような視点から, 自分たちの活動を見直してみると, 健康教育の進め方や住民との話し合いの仕方, 事業の組み方が, 住民主体, 住民参加とは言うものの, 行政中心, 自分たち中心になっており, 行政全体の住民参加になっていたのではないかということに気づいた。では, ほんとうの住民参加, 住民主体になっていくためにはどうしたらいいのだろうか, ということが次の課題として浮かび上がってきたのである。

もう一つの課題は, 健康を実現することが目的であるとしても, 普段の事業の目的をどうしたらいいのか

1) 千葉県八千代市健康管理課

2) 国立公衆衛生院疫学部

ということである。自分たちは、事業を見直す場合、その目的をそれほど意識せずに、そのやり方や内容の検討に終わっている。どうすれば、明確な目的を確認することができるだろうかということであった。

健康センターでは、住民参加と自分たちの活動の目的確認のために、いろいろと試みた。KJ法や看護分野の問題解決の考え方をみんなで学んだり、さまざまな試行錯誤が始まった。

このころ行われた保健所の管内保健婦研修会での事例検討で八千代市は、それまでの自分たちの学習から得た疑問や問題点、それらをもとに改善を加えた活動の事例を出した。数日かけて検討し、徹夜までしてまとめた自分たちの活動報告であった。ところが、この時に助言者として来ていた講師は、その事業の工夫した点や保健婦が提示した疑問、あるいはまとめ方には目も通さず、「目的の設定に問題がある」と言ったのである。しかもそのとき、事例を検討するはずの研修会が、目的をどのようにして話し合い、設定していくかという内容になってしまったのである。

その時、保健婦たちは「私たちの悩みや疑問に何も答えていない」「私たちが活動事例を通して考えたことを、みんなで検討しようということではなかったのか。話が違う」などと思いつつ、これは、私たちがやろうとしていた「目的を確認する」という一つの方法ではないかと思った保健婦たちもいた。

保健センターに戻って、研修会で提示された目的確認の方法をやってみようという保健婦と、それに反対する保健婦とがいた。反対の理由は、「あれは目的というより、理想を掲げているだけではないのか」「やりかた違ってよくわからなかったし…」などであった。

その議論はしばらく続いたが、自分たちはこれまで、いろいろな方法を試してきたが、なかなかうまくいかなかったんだから、とにかく取りかかってみようということになった。

3. 八千代市でやろうとした方法

いま八千代市の母子保健で進めようとしている展開方法は次の通りである。それはまず、問題点をまず見つけ出し、その原因を探り、その原因の除去を目指すという方法からの脱却であった。問題点を見つげ出す前に、子育てや母親自身の暮らしの姿の理想の姿を見

つけ出すところから出発するというものである。

母子保健の計画を作成しようとするときに、これまで私たちは、母子保健に関するデータを集めるところから出発していた。出生数を調べ、周産期死亡や低体重出生、乳幼児の死亡、妊産婦死亡などの数を調べて割合を出してみる。どの数値も非常に少ないので、3年や5年間の計で表して、全国値や近隣の市町村、保健所管内の他の市町村と比較してみる。そこで問題点を探そうとするが、特に見つからない。あるいは、人口10万対や出生1万対に1人や2人の違いを大騒ぎする。そうでない場合は、妊産婦の行動や態度、あるいは愚痴などから、何か問題点はないかと探す努力をする。

自分たちの地域の新米母親たち自身の将来への期待や、「どんな子育てをしたいと思っているのか」「どんな母親になりたいと思っているのか」を明らかにすることなく、母親としての不安や問題点はがりに目を向け、保健活動として取り組みの課題を問題点という形で見つけ出そうとする。

そうではない進め方。つまり、自分たちの地域でのあるべき子育ての姿、あるべき母親の生活の姿、両親と子どもとのあるべき暮らしの姿を、自分たちの地域での母子保健活動の目的として描き、それを実現するために必要な条件を考え、それらの条件を整えるために、誰が何をすべきを明らかにし、それを実行していくという保健活動の展開方法を、いま八千代市では進めようとしているのである。

自分たちの地域の人口や出生数、乳児死亡、産業構造や地域特性など、その地域での子どもや母親の理想の生活の姿を描きだすために必要な情報については、概ね知っている。概略で把握している自分たちのそのような地域で、子供たちや母親、あるいは父親も含めてどのような暮らしができればいいかを、まず考えるところから出発しようということである。それをまず、スタッフ間で考えてみる。そのうえで、住民や当事者と目的とする地域の姿やそれを実現する条件を考えていく。つまり、住民とともに、保健活動の方向性を決定する、いわゆる住民参加型の活動といえる。

4. スタッフ間での話し合い

この展開では、話し合いの参加者が、それぞれのイ

メージする目的を、住民の暮らしの姿として表現し合うところから始める。目的を抽象的な表現ではなく、実現したい住民のより良い暮らしの姿を具体的に表現する。八千代市の母子保健では、「八千代に住む1歳から2歳の子供とそのお母さんが、どんな暮らしができたらいいか」ということで、話し合いを始めた。ここで、「1歳から2歳の」と限定するのは、イメージを出しやすくするためである。まず、保健センターの職員での話し合いが始まった。職員が4～5人ずつにわかれ、それぞれに、八千代市での子供と母親の理想の姿を話し合いはじめた。

そこでは「お母さんが子供に絵本を読んでやっている」「子供とお母さんが公園で砂遊びをしている」「母親同士が公園で育児について話をしている」「ときには、両親が子供を預けて映画に行く」などが具体的な姿として出てきた。これらは、後に母子保健計画の目的として抽象化されると「母親がゆとりを持って子供と接することができる」とか「ゆとりのある育児ができる」という表現になる。ここであげられた具体的な姿を実現するための条件について、保健センターの職員間で話し合いを進める一方、母子保健推進員の活動をこのような展開で進めることになった。

母子担当者は、市全体の母子保健推進員の研修会で、八千代市のお母さんと子供とのあるべき暮らしの姿を話しあうことにした。地区によっては、推進員が自分たちのこれまでの活動を基に、保健婦と一緒に「こんな育児のできる地区になったらいいね」という話し合いをして、全体の研修会に望んだところもあった。

5. 母子保健推進員研修会

1994年7月20日、保健センターでは、母子保健推進員の研修会が行われていた。推進員が、それぞれの担当地区ごとのグループになって、話し合いを進めているのだが、すごい熱気である。もちろん、各グループによって話し合いの雰囲気は微妙に違っている。どんどん意見を言う人、ほとんど聞いているだけの人、それでもそれぞれのグループのなかでは、みんなが話し合いに参加している。話し合いの内容は、それぞれの地区での母親と子供の理想の生活の姿である。話し合いの進行役として、各グループには、その地区を担当している保健婦が1～2名ずつ入っているのだが、彼

女たちもグループによって、推進員と一緒にわいわい話している保健婦、「こんな内容になるはずじゃなかったのに、どこで修正したらいいんだろう」という表情をしている保健婦、「いまこんな話し合いになっているけど、そのうちなんとかなるだろう」という雰囲気など、保健婦は各グループのなかで、それなりに落ちついて対応していた。

保健婦たちは、感想として「推進員があんなに意見を出してくれるとは思わなかった」と言った。この話し合いが始めるまで、保健婦たちには「推進員は意見を出してくれるのだろうか」「いろいろな意見が出てきたとき、どんな対応ができるのだろうか」という不安があったのである。

もちろん保健センターでは事前に、保健婦、看護婦、栄養士、歯科衛生士たちが、八千代市での母親と子供の理想の生活の姿について、話し合っていた。そして、自分たちなりのイメージは持っており、話し合い自体も、どのように進めるべきなのかは分かっていた。さらに、地区によっては、すでに担当保健婦と推進員とで、話しあっていたところもあった。それでも不安があった。なぜなら、推進員が一堂に会して、しかも研修会という形でのこのような話し合いをするのは初めてだったのだから。

これまでの推進員の研修会といたら、八千代市の出生数や乳児死亡などの割合、保健婦や推進員の訪問件数などを報告し、推進員が訪問で困ったケースについての学習や、来年度の行事予定の確認などをやって、その後、いろんな質問を受け、最後に市への要望を聞いたり、市から推進員へのお願いをして終わりというパターンで、あとはなんとか研修会は終わっていくものであった。毎回同じパターン、そして結局は、願う側とされる側。住民参加が必要だということはよくわかる。会議のたびに、推進員はいろんな意見を聞かせてくれる。進んで行事に参加してくれる。これを住民参加とっていいのだろうか。

しかし、今回は違う。その地区の推進員と保健婦とが、自分たちの地区での理想の子育ての姿、母親の生活の姿、子供と母親との生活の姿、父親も含めた生活の姿を話し合おうというものである。推進員も保健婦も日常の自分たちの活動で感じていることをもとに、思い切り、その思いのたけをぶつけ合っているのではあ

る。話し合いが熱気を帯びてくるのも当然である。

そしてこの研修会の終わりに、保健婦は一人の推進員から呼び止められた。「私たちはこの時を待っていたのよ、やっと、私たちの話しを聞いてくれたのね」この言葉を聞いた保健婦はショックをうけた。「私たちは、研修会の合間や、活動を進めているときでも、推進員さんたちには極力声をかけるようにし、推進員さんたちの話しや意見は極力聞いていたつもりだった。しかし、推進員さんたちにとって、そうではなかったのだろうか」その気持ちと同時に、「いま、私たちがやろうとしている方法は、大切なことなのかもしれない」という思いが胸をよぎったのである。

6. 現状の調査と計画づくり

職員間や母子保健推進員とあるべき姿や条件を話し合い、そこに示されたあるべき姿や条件について、現状を把握するための調査を行うことになった。自分たちで調査の対象や方法を考え、決定することになる。

あるべき姿やそれを実現するための条件を考え、その現状を捉えて将来的な達成目標を検討し、それらの条件を整えるための活動を考える。このプロセスで自分たちが考えたり、検討した記憶をまとめ、整理することで計画書となる。

7. 「すてっぷ21」での話し合い

八千代市の母子保健推進員は、保健婦と勉強会をする中で、母親に対して公園などの育児環境に関して聞き取り調査をしたり、2～3カ月の乳児への家庭訪問などを行っていた。推進員はそれらの活動を通して、母親が自由に集ったり、雨の日でも子供と気軽に遊びに行くことのできる場の必要性を認識していた。一方、保健センターや児童福祉課の職員も、そのころ廃止された保育所の建物を小さい子供や母親が自由に遊びに来ることのできる場にしたいと思っていた。

その推進員の認識と職員の思いが一緒になり、推進員からの市への働きかけもあって、1994年5月に「すてっぷ21」として、育児支援センターが開設され、職員として、所長も含め保母3名と非常勤の看護婦が採用された。

8. 「すてっぷ21」でのもやもや

開設するまでは、その準備に追われながらも、母親や子供のための場という夢が実現する喜びを感じていた。しかし、開設後、具体的な運営を話し合う過程で、関わっている人たちの「おもい」が少しずつ違っていることにお互いが気づいていった。配属された保母は「指導ではなく、見守る保育を」と言われても、具体的な場面でどうすることなのかわからず、不安や戸惑いがあったり、母子保健推進員は、誰でも気軽に利用できる施設と思っていたが、利用できる子供の年齢が制限されたことに不満が出てきた。期待が大きかっただけに、できあがったものに対する不平や不満が、具体的な場面での意見の食い違いとして現れ、関係者の間に思わぬ溝が出始めたのである。両者の思いを聞ける立場にあった保健婦は、この溝を感じ「みんな同じ思いのはずだったのだから、もう一度関係者それぞれの思いを整理し、『すてっぷ21』の目的とそれに沿った運営方針を確認し合おう」と提案した。そこで、児童福祉課の課長、係長を始め、ケースワーカーや臨床心理士、公立保育園長、保健センター保健婦、母子保健推進や主任児童委員、「すてっぷ21」の職員などをメンバーとして推進会議が設置された。

9. 推進会議での話し合い

推進会議では保健婦が、そのころ保健センターで進めていた話し合いの方法、つまり実現すべき目的を具体的な生活の姿で表現するところから出発する話し合いを提案した。八千代市に住む母親と子供の理想の姿をまず話し合い、それを実現するための手段としての「すてっぷ21」そのものや各職種の役割や機能を見いだそうということである。不平や不満がたまった状態で話し合いを始めたため、最初の頃はこの進め方にも半信半疑であった人もいた。

とりえず「八千代市のお母さんと子供の理想の姿」から話し合いを始めた。最初は「すこやか」「安心して」などの抽象的な表現であったが、次第に「お父さんと2～3歳になる子供が公園の砂場で遊んでいる」「子育て中のお母さんが友だちとお芝居を見に行ける」など具体的な姿が出され、その上位目的として、「母親がたまには子育てから離れて気分転換をする」「母親のゆと

り」ということが話し合われた。さらにこの具体的な姿を実現するための条件を話し合っていたのだが、もちろんこの話し合いのすべてが順調にいったわけではなく、この進め方に対する不慣れからくるさまざまな戸惑いや停滞があった。

あるべき姿や条件を話し合う中で住民はふだんの生活や地域の情報をもとに非常に具体的で豊かな発想ができ、市の職員は、出された意見を、問題点として捉えて、すぐに解決策を考えようとする傾向が見られた。

話し合いの過程で、若い世代の両親の気持ちが分からないということになると、誰からともなく「保健センターでの事業やすてっぷ21に来る人たちに直接聞いてみよう」ということになり、聞いたことを持ち寄って自然に話し合いができるようになった。このプロセスのなかで、最初に感じていたそれぞれの不安や不満は、いつのまにか解消していき、見守る保育ということの具体的な意味が分からず自信をなくしていた職員も母親たちと自然に話しができるようになり、生き生きとしてきた。最初は消極的に参加していた人たちも、自分の考えを言うようになった。また、児童福祉課の職員から「母子保健推進員は、圧力団体のように思っていたけれど違っていた」という発言も出て、目的を具体的に話し合い、共有する過程で、お互いの考えも理解するようになっていった。

この話し合いを通して、行政の職員は、住民は教え導き与える相手ではなく、共に考え、共通の目的のために互いの役割を果たし合う関係であるということを実感したといえる。

10. この話し合いとヘルスプロモーション

これまで業務の検討といえば、まず、「いま自分の仕事の中で、抱えている問題をどうしようか」と目の前の問題への対処方法を検討し、その結果さまざまな工夫をして、根本的なところは変わらないということを繰り返してきた。しかし、今回の検討は、地域に住む人たちの暮らしの理想の姿を母子保健活動の目的として捉え、それを実現するための条件や方法から話し合いを始めるため、話し合いの内容には、自分たちが現在を直接はかかわっていない業務以外のことが出てくる。たとえば、「安心して遊べる公園」を考えただけでも、行政のさまざまな分野、そこに住んでいる人、母

親自身など、いろいろな人や物事が関係していることがわかってきた。つまり、市民が健康で、生きがいを持った生活ができるためには、これらのすべてが整う必要があること、そのために、ネットワークを広げる働きかけをしていく必要性を実感として感じていったのである。これらのことは、まさに WHO のいうヘルスプロモーションの実際の地域での姿ということができる。

11. この話し合いを通して

この話し合いを進める中で、推進会議では、すてっぷ21の目的を共有し、それぞれの役割を確認することができた。そこからいくつかの具体的な事業が生まれてきた。たとえば、保健センターの事業である「マタニティー講座」をすてっぷ21で開催し関係者みんなの協力で実施することができた。また、母親が子育てを学ぶ場として補助金を得て設定されていた「育児講座」も最初は講師を呼び講義形式で考えていたものが、この話し合いをする中で、母親自身が子育てについていろいろな考え方を持っているはずであり、そのようなことを話し合う中から母親としての役割や自覚も見えてくるのではないかなどの意見があり、母親同士が「どんな子育てをしたいか」を話し合う場となった。さらに保育所の地域への開放ということも広がりつつある。

12. 母子保健計画に向かって

平成8年4月から、現在、八千代市では福祉が中心となって、「子供プラン」を作成するための準備会を進めている。そこではすてっぷ21の推進会議が中核となり、児童福祉課の職員も入って話し合いを進めており、これまでの話し合いの内容が、市の計画に生かされる期待を持っている。問題点を明らかにしてからその問題の解決策を明記する計画書を意識している人もいるが、活動を進める時に、見なくても事業はできるような計画書は作らないようにしようということでは一致し、策定のプロセスを大切にすることを確認して、徐々に計画書に向かって進んでいる。

13. 最後 に

八千代市での母子保健推進員のなかで、話し合いと

すてっぶ21での話し合いを中心に活動の展開を紹介した。現在、まだ進行形であり、具体的な数的な成果は現れていない。しかし、ここでは保健婦など保健センターの職員が自分たちだけでは健康づくりはできないことを認識しており、さまざまな場面で、住民や他の分野の行政や専門職と積極的に話し合おうとしている。その中から、自分たちにはできることは見えてくると思うとそのような話し合いをすることがわくわくすることなのである。しかもそのような話し合いから生まれた事業は自分たちだけがすることではなく、それぞれの役割を果していくことであるので、背負ったり、

没頭する必要もない。目的は具体的に表現され、現状の調査もしてあるので、数年後に同様の調査をするのが楽しみでもある。いま、保健センターの職員が生き生きしている。そのうち、この町に住んでいて良かった、この町で子育てができて良かったという人たちが増えてくるかもしれないという期待を持っているのである。

参考文献

- 1) 岩永俊博：住民参加型の保健活動・I，公衆衛生，60(6)，428-431，1996